

シャンペンの酔いがすっかりふたりの心を舞いあがらせていた。おまけに、窓からの眺望は、一千万都市、東京の夜景だ。B・G・Mは、琴の音！

（これが一番エキサイティングだと、彼は思っていた。どうして日本の女の子たちは、ベッドでコトサウンドを聞きたがらないのだろうか？ 伝説によると、彼のひい爺さんは、バグパイプを演奏しながらひい婆さんにのっかったらしい。民俗音楽はいつだって、ベッドではエキサイティングなのに）

「おお、クリス、溶けちゃいそう……」

彼の唇をうなじで受けながら、女が呻いた。発音は完璧なクイーンズイングリッシュだった。彼はしらけた思いで女を見やった。

（どうして日本の女の子は、日本語を解する場合であっても相手がガイジンとなると、こうも英語でピロウトークしたがるのだろうか。本当に溶けちゃっていたら、外国語など使えるわけがないではないか）

「あなたのその瞳が好きなの」

女は英語でいって、彼の頬を両手ではさみ、振り向かせた。唇を重ねる。

「甘いブルーと、冷たいグレイが混じっていて、何といえはいいのかしら……」

女は切なげに溜息をついた。

（頭を使っちゃ駄目だよ、醒めちゃうじゃないか！）彼は思った。

「そうよ、危険なの、危険な匂いがするのよ、あなたからは……。どうしてなの、教えて、お願い！」

（これだ。この言葉だけは聞きたくなかった。危険だつて？ 冗談じゃない。僕ぐらい危険と無縁に生きたがっている人間はいないっていうのに——）

彼は溜息をついて、女から体を離れた。いつだって、どんなときだって、女の子は大歓迎だ。ただし、危険だとか、勇敢、なんて言葉で彼を形容さえしなければ。

「どうしたの、クリス。なぜやめちゃうの？」

「僕は日本語ができる」

彼は日本語でいった。

「それに、クリスじゃなく、ヨシオと呼んでくれともいっただろう」

「アーム・ソーリー」

「ちがう！ 日本語で喋って欲しいといってるんだ！」

彼はベッドの上でとびあがった。

「でもあなただったら、どこから見ても完全なイギリス人で。それにあたし、相手が外人だと

思った方が燃えるんだもん」

女は唇をとがらせた。

とたんに、電話のベルが鳴り響いた。

(ええい、いまましいー！)

彼は受話器をつかんだ。わざと英語でいつてやる。

「ハロー！」

「ミスター・クリストファー・ヨシオ・ウォーカー？」

「そうですよ」

「英国大使館のサー・ゴードン・ウォーカーからお電話が入っております」

神様——彼は天を仰いだ。なぜここに大叔父から……と思う暇もあらばこそ、受話器に雷鳴のような怒鳴り声が響いた。

「クリス！ ヨシオ！ お前がなぜそこにおるのかはわかっておるんだ。今度はどの娘だ？ スチュワードスカ、モデルか。馬鹿者！ 我がV・G・S社の経費でスイートルームをとり、一壘三十ポンドもするシャンパンを飲んでおるのだろう。すぐにそこを出て、これから農^わがいうところに来るのだ、この大英帝国の面汚しめが！」

きっかり十秒後、彼は電話を切ると、ベッドから立ちあがり、幽霊のような足どりでバスルームへと向かった。

鏡に映った自分の姿をまじまじと見る。

身長百八十五センチ、体重七十四キロ。厚い胸板と濃い胸毛は、ウォーカー家の伝統である。濃いブラウンヘアにブルージェイの瞳は、確かにどこから見ても日本人ではない。しかし、彼の半分、母親のマサコ・ウォーカーの分だけ、彼は日本人だった。ウォーカー家に混血児が生まれた歴史はない(多分)。彼がウォーカー家にとって特殊な存在であるのは、それだけが理由ではないことは、彼もよく承知していた。

ウォーカー家は、大英帝国の輝かしい歴史(と、彼を除くウォーカー家の人間はひとり残らず思っている)の中で、特に勇猛と愛国心を称^たえられた人物を輩出している。古くは、大英帝国海軍の、クリストファー・ウォーカー提督(十七世紀)、近くは、今、電話をよこした旧MI6↓S・I・S(英国情報部)元長官の大叔父ゴードン・ウォーカー卿。他にも軍人、探險家、武術家と枚挙に暇がないほどだ。

そして、彼。先祖の提督と同じ名を与えられ、もうひとつ母親から良志雄^{よしゆう}という名を与えられた、クリス・ヨシオ・ウォーカー、二十六歳。受け継いだウォーカー家の血筋は、類^{たぐい}まれないな女好き。受け継がなかった伝統は、勇氣、愛国心、勤勉。

即ち、頰^ほを好み、冒険を嫌う性分。

S・I・Sを退いたゴードン・ウォーカー卿が、諜報員時代の経験を生かして、要人警護システム社(ベリー・インポータント・パースン・ガード・システム・カンパニー・リミテッド)、略してV・G・S社を設立したとき、軍人にも、冒険家にも興味を示さず、ひたすらピカデリー広場でナンパに励んでいた(対象は、もっぱらロンドン見物の日本人OL・

女子大生) 彼を、「性根をいれかえてやる」目的で無理矢理入社させたのが二年前。

ヨーロッパでまず最初に大叔父にとばされたのが、国際テロ団による誘拐が頻発する、イタリアはローマ。

血も涙もないテロリストとやりあえば少しは根性がすわると考えたウォーカー卿の目論見はみごとに外れた。最初の仕事では、護衛する筈だった靴メーカーの会長の孫娘とデキてしまい、結婚詐欺で訴えられ、要した示談金が十億リラ。二度目の仕事では、護衛の対象は、寝たきりの八十七歳の老農園主だったものの、情報収集に接近してきたテロリストグループの女闘士三人と仲良くなり、乱交パーティーの現場に、イタリア警察が踏みこんで、逮捕というありさま。このときもウォーカー卿はモミ消し工作に多大なる時間と金を消費し、イタリア政府にS・I・Sぐるみの大きな借りをこしらえた。

次いでとばされたのが西ドイツ。ここではさすがに女の間違いは犯さなかったものの、どういうわけか東ドイツ人のホモに追いかけて回され、あやうく犯されそうになった。パンツ姿で国境の壁にぶらさがり、国境警備隊に保護されるという大恥。

その次のアラブでは、またまた心配どおり、女のトラブル。王様のハーレムから女の子二人を連れて逃げ出し、チン詰めチン詰めの刑に処される直前、その国で革命が勃発。王様は革命軍によって処刑され、彼は、ちよつとした反王制の英雄となるものの、肝腎かんじんかなめの護衛すべき人間が、その王様とあって、V・G・S社の中東での権威は失墜した。

ゴードン・ウォーカー卿によって、クリス・ヨシオ・ウォーカーは、頭痛の種でも何でも

なく「歩く頭痛」そのものなのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。